

## 審査員特別賞

人の思いやりから繋がる世界

仙台市立三条中学校 2年

今井 弓詠

「ただいま。」

私が学校から帰ると、見慣れない茶色の小さな紙袋が机の上に置かれていた。

「おばあちゃんこれ何？」

「りょうちゃんからもらったコーヒー豆よ。娘さんのフィリピンのお土産なんだって。」

りょうちゃんとは、祖母の高校時代からの友人で年に4、5回千葉から訪ねてくるおばさんだ。娘さんは今、フィリピンに住んでいてカフェを経営している。

彼女はなぜ日本を離れて仕事をしているのかというと、以前青年海外協力隊として、フィリピンの支援活動を行っていたのがきっかけだ。帰国してからも、もっと支援をしたいという思いがあり、農業について大学で学んだ。

彼女が移住先に選んだのは、中心部からバスや徒歩で半日以上かかるような貧しい地域だった。そこでは、コーヒー豆の栽培が行われていたが、十分な収入を得る事ができていなかった。そんな状況を見て彼女は豆の選別の仕方を教え、質の良い豆を多く出荷ができるようになった。もっと多くの人にコーヒーを知ってもらうために、カフェを開いただけではなく、コーヒーメーカーを販売して家庭でも簡単に美味しいコーヒーを楽しんでもらえる工夫をし、結果として、コーヒー豆が売れるようになったそうだ。

観光客も来ないような場所に突然やって来た日本人を、現地の人々はすぐには受け入れる事ができなかったのではないだろうか。しかし、今では方言であるイロカノ語を話す彼女をきっと信頼しているであろう。

最近の娘さんのツイッターに、腰まであった髪を切った事が書かれていた。フィリピンでは病気で髪が抜けても、カツラを買えない子供達がたくさんいるそうだ。その子達のために自分の髪を利用してもらうらしい。彼女は、どんなに自分の利益にならなくても、今自分のできる精一杯の事をしているのだ。

私は今まで自分の事ばかりで、他の国で貧しい思いをしている人の事に気付けなかった。日本での恵まれた生活が当たり前だと思っていた自分が恥ずかしい。今は髪の長い人を見る度にその事を思い出し、考えるようになった。

まだ中学生の私にできるのは、小さい事しかないが、少しでも人の役に立ちたいと思い、市のジュニアリーダーとしてボランティア活動を始めた。様々な依頼に応えているうちに、社会は多く

の人との繋がり成り立っている事に気付けた。それは、他の国との関わりでも同じであろう。一人の思いやりが、フィリピンの誰かを救ったように、私も誰かに支えられているのだ。今のこの気持ちを忘れずに、持ち続けていきたい。